

高病原性鳥インフルエンザ実地演習

12 月 9 日、中丹広域振興局管内の府・市職員約 70 名が参加し、高病原性鳥インフルエンザの発生を想定した実地演習が、畜産センター等で開催されました。この演習では、実際に鶏をケージから取り出す作業を行うため、模擬鶏舎を組み立てるなどの事前準備を行い、当日は、当センターが管理している防疫服、マスク、ゴーグル、長靴などの備蓄資材の搬出作業と着脱実習も行いました。



前線基地に搬入した資材を着用する防疫作業者（農業大学校体育館）



発生農場を想定した模擬鶏舎と防疫作業者

畜産センター

(平成 23 年 12 月試験研究業務月報)

試験研究課題：家畜ふん乾燥ハウスにおける冬季の乾燥能力の向上

研 究

冬季の能力を向上させる「家畜ふん乾燥ハウス」を開発中

冬期の家畜ふん乾燥ハウスは、日射量低下に伴い、乾燥能力が低下します。

畜産センターでは、少ない日射量を最大限に利用し、家畜ふん乾燥ハウスの能力向上を図るシステムを開発しています。このシステムは、ハウス内の地表面温度や湿度と外気温などをセンサーで感知し、ハウス内の空気の攪拌とハウス内外の換気を自動的に行うもので、現在、実験施設では、攪拌・換気を適時に行うためのデータを収集しています。

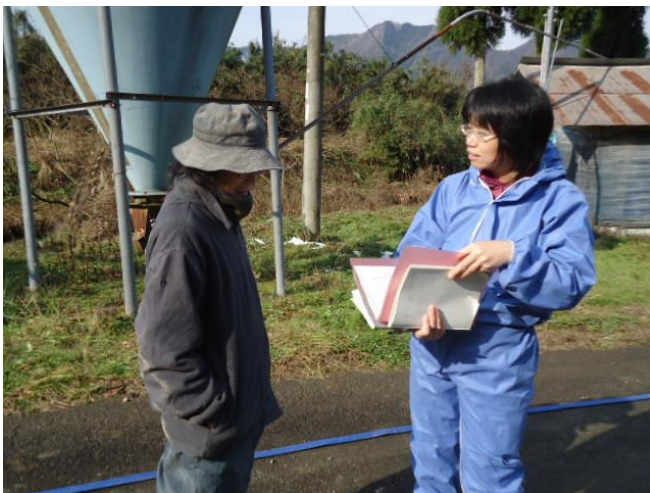


家畜ふん乾燥ハウス実験施設

畜産センター

府内産小麦を利用したこだわりの鶏卵生産

畜産センターでは、「府内産の小麦を給与したい」との養鶏農家の要望を受け、小麦を使った飼料配合メニューを作り技術指導を行いました。採卵鶏の飼料としては、小麦は一般的ではありませんが、トウモロコシの代替となり、嗜好性も良好です。一方、小麦の配合割合が多くなると消化吸収や卵黄色に影響があります。今回の指導では、徐々に小麦の割合を高めたところ、輸入トウモロコシの約4割が小麦に置き換えられ、飼料の約半分を国産原料で賄うことが出来ました。



小麦配合メニューの確認と鶏の様子
の聞き取り

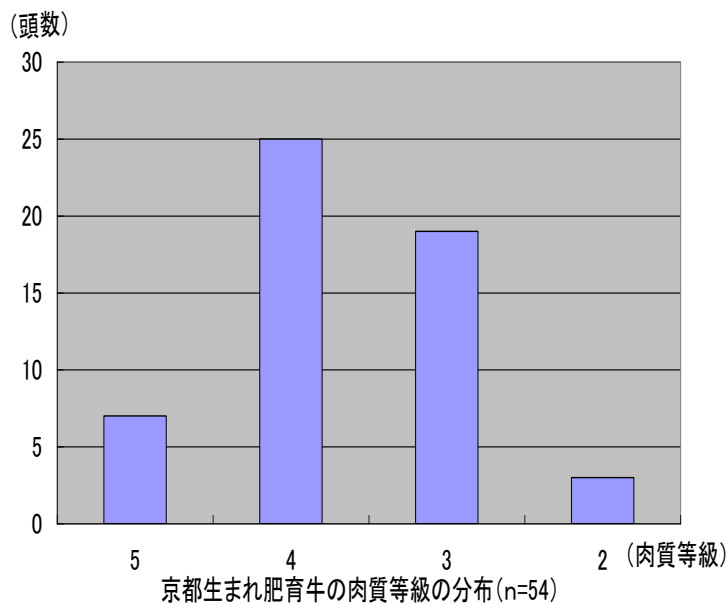


ゆったりと飼育されている鶏は、穏やかで
食欲も旺盛

「京都生まれ京都市育ち」の枝肉成績を子牛生産者に情報提供

毎月、京都市中央卸売市場第二市場で開催される京都肉牛枝肉共進会や京都肉研修会では、府内の肉牛生産者から黒毛和種肥育牛が出品されます。平成 23 年に出品された 287 頭の内、54 頭の「京都生まれ京都市育ち」の牛の枝肉は、上物率（格付け A 4 以上）が 59%、平均枝肉重量が 475kg と優れた成績でした。

畜産センターでは、これらの成績を関係農協を通じて府内の子牛生産者に情報提供し、次産の子牛がより良い肥育素牛となるよう支援しています。



京都で生まれた肥育牛の枝肉
(第 6・7 肋間断面)

雌判別精液を使った人工授精成績

畜産センターでは、90%以上の確率で雌子牛が生まれる「雌判別精液」で人工授精を行っています。現在までに授精した 47 頭の受胎率は 45%で、通常の性判別していない精液の受胎率と遜色のない成績で、その内訳は経産牛で 33%、未経産牛では 46%となりました。今までに生まれた 7 頭はすべて雌で、今後は、雌牛の生産頭数が増えることから、育成後には農家に譲渡する予定です。

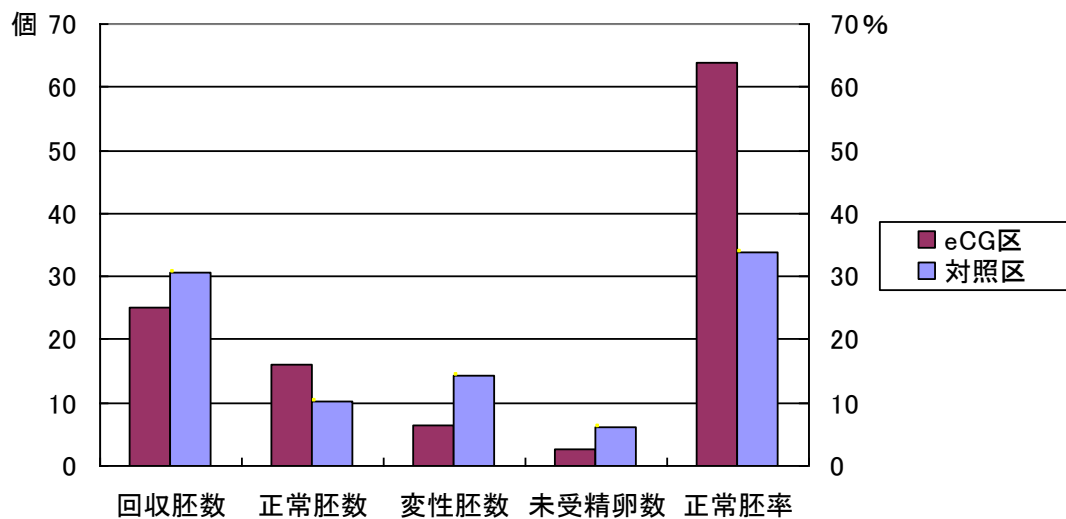


雌判別精液で生まれた雌子牛

牛の過剰排卵処理方法の検討

牛の受精卵を採取する前に行う過剰排卵処理では、従来、FSH（卵胞刺激ホルモン）を3日間で6回注射していますが、牛のストレスと人の作業量を軽減するために行った6回分を1度に注射する FSH 1回投与法でも、従来と同等の採胚成績が得られていました。

今回、採胚成績をさらに向上させるために、FSH 1回投与法に eCG（妊馬血清性腺刺激ホルモン）を併用したところ、FSH のみを投与した対照区と比べて正常胚数が増加しました。今後は、これらの成果を活用し、採胚を行います。



採胚成績の比較

長い冬に備えて

碓高原牧場は、積雪が 2 m を越える豪雪地帯にあり、12 月になると併設している畜産展示施設（まきばホール）はドアや窓に雨戸をはめたり、軒下に支柱を立て、雪害を受けないように補強します。また、ふれあい家畜は、12 月から 4 月までふれあい広場から冬期畜舎に移動し、ヒツジやヤギは、冬期畜舎で出産します。春には子ヒツジや子ヤギたちも、観光客とのふれあいに活躍します。



軒下に補強支柱を立てる（まきばホール）